

世田谷区役所本庁舎等整備に関する
「区民交流スペース」ワークショップ基調講演

参加・交流・協働 の場所づくりの いくつかのヒント

弘前大学大学院地域社会研究科
(公益信託世田谷まちづくりファンド運営委員長)
(元(一財)世田谷トラストまちづくり職員)
土井良浩

はじめに

本日はお話しすること

1. 世田谷区の“公設”市民活動スペースの現状
2. 参加・交流・協働の在り方を考えるための事例紹介
3. 地域課題解決プラットフォームを機能しやすくする場所づくりのためのヒント
4. おわりに

1. 世田谷の “公設”市民活動スペース の現状

世田谷区にある 「区民施設」

- 区民会館：世田谷、北沢(北沢タウンホール)、玉川、砧(成城ホール)、烏山の5箇所
- 区民会館別館：三茶しゃれなあと、梅丘パークホール、上用賀アートホールの3箇所
- 区民センター：12箇所
- 地区会館：47箇所
- 区民集会所：30箇所

※上記の諸施設はあくまで「空間がある」だけが「市民活動」でも使用可能

世田谷区の市民活動に関わる 「相談窓口」のある中間支援組織 (世田谷区HP記載のもの)

- (公財) せたがや文化財団 生活工房、NPO法人 国際ボランティア学生協会 (生活工房市民活動支援コーナー<三茶>)
- (一財) 世田谷トラストまちづくり (ビジターセンター) <梅丘/喜多見>
- (社福) 世田谷区社会福祉協議会<成城学園>
- (社福) 世田谷ボランティア協会 (ボランティアセンター・ビューロー) <下馬/代田/梅丘/玉川>
- NPO法人 NPO昭和 (世田谷区立男女共同参画センターらぷらす) <三茶>
- NPO法人 まちこらぼ<山下>

世田谷区にある 市民活動に供するスペース

- ボランティアセンター・ビューロー：会議室
- 生活工房：セミナールーム、ワークショップルーム、ギャラリー、市民活動支援コーナー
 - 活動団体にNPO法人設立・運営の個別相談も
- 男女共同参画らぷらす：①情報・交流コーナー、②活動コーナー(ブース)、③子どもスペース、印刷コーナー、ライブラリー、研修室 (NPO昭和が運営管理)
 - 女性やマイノリティのための相談事業も実施
- なかまちNPOセンター：共有スペース (NPO法人まひろが運営管理)、貸事務所
- 社会福祉協議会：各地域の支えあい活動拠点 (「ふれあいの家」など、サロン・ミニディ活動のスペース)

世田谷区の中間支援組織の 「フリースペース」は？

- ボランティア協会：ボランティアセンター<下馬>
 - 「フリースペース」
- トラストまちづくり：ビジターセンター<喜多見>
 - 「図書コーナー」「展示コーナー」
- 生活工房：市民活動支援コーナー<三茶>
 - 「フリースペース」
- 各組織とも別途「会議室」あり、登録団体に貸し出し

小括

現在の世田谷区内の市民活動
のための施設・場所

- 市民活動団体、地域団体が利用できる会議室やホール空間は各地域に点在している
- フリースペース的場所（何となく訪れて、滞留することのできるような場所）は少ない
- 中間支援組織も貸し出し用の「会議スペース」か小さな「フリースペース」しかもたない
- 今回のような市民活動のための協働・交流の「常設的空間」は世田谷初

2. 参加・交流・協働 の在り方を考えるための 事例紹介

「参加」を促し、次に繋げる

事例①：ポータルミュージアム はっち (八戸市)

- もともとは「三社大祭」の山車をメインに展示する観光施設の構想だった（あくまで観光客向け）
- 「八戸の市民（事業者含む）などが活動している風景を訪れた人に見てもらいたい」とのコンセプトに変化
- 観光客だけでなく、普段から街中を利用する市民も訪れたいくなるような催し物や仕掛け（元々中心市街地活性化計画の一環として、来街者を増やすことが目標）



ポータルミュージアムはっち





事例②：松の湯交流館 (観光・交流施設+カフェ、黒石市)

- ・青森県内で数少ない伝統的建造物群保存地区を有する地域
- ・「こみせ」という建築様式（他地域では雁木とも呼ばれる）
- ・1990年代に市民の中に保存の動きが生まれ、まちづくり会社も生まれたが、中心市街地は衰退
- ・最近7年間で、行政・市民とが協働して活性化に向けたアクションが生まれている



特定非営利活動法人 横町十文字まちそだて会 概要

- 活動場所：黒石市「横町十文字エリア（こみせ通り商店街協同組合+横町向上会）」
- 設立時期：'12年7月（市の「街なか通り再生プログラム」を通じて形成）、'14年NPO法人化
- 目的：中心市街地に「第3の場」をつくる（まちなかの滞留時間を延長する）

※「第3の場」・・・家でもなく職場・学校でもない「ホッとくつろげる場所」、「あずましい場所」

まちそだて会のメンバー構成



年齢平均40歳代、住民あるいは元住民がほとんど

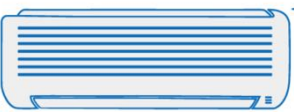


まち歩きツアーの開発&継続的实施

基本を学ぶ！
初心者向け薬膳ランチ付き
中国語講座

蔵で蔵出し酒の会
平成29年
3月17日
18:00~20:00
会場 桜の湯交流館

あなたもできる！
**簡単エアコン
お掃除講習**



これから大活躍するエアコン。
今のうちにしっかり自分でお掃除しよう！
これからの季節、大活躍になるエアコン。
でもエアコンはしっかりお掃除しないと、故障や風量も落ちてきます。
「エアコンのお掃除ってどこからどこまですればいいの?」「お掃除のしかた

ランチ付き！手品農園の
**はあとふる
手相占い**



あなたの運勢は？性格は？本当の自分に会えます
行列のできる手相占いで評判、手品さんの手相占いを開催します！
ユーモア溢れるきさく手品農園さんの手相占い。
あなたの運勢、性格、自分のことが知られる？

事例③：
世田谷トラストまちづくり大学
(世田谷トラストまちづくり)



- 「環境共生・地域共生のまちづくりの理念のもと、現場を知り体験し考える中から身近なみどりの保全やまちづくり活動に携わる実践者の育成」を目的
- まちづくりや環境保全の基礎知識、まちづくりに有用なファシリテーションの技術や、自然環境体験を促す手法であるインタープリテーションの技術などの体得を目指す
- 知識・技術の習得だけでなく、「まちづくりの現場」での実践を組み込んでいるのが特徴

事例③：
世田谷トラストまちづくり大学
(世田谷トラストまちづくり)

- 受講日数は、専門コースで10回以上平日夜間か休日の昼間に開催
- 受講者数は15~40名程度
 - 1~2割程度は30代未満の若年層
 - 学生が受講する年も
- 専門コースの受講を通じて、まちづくり拠点の継続的な運営に結びつくことも

例：岡さんのいえTOMO 他

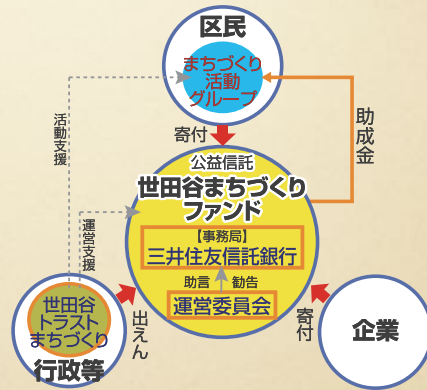


「交流」を生み出す

世田谷で「交流」といえば…

事例④： 公益信託 世田谷まちづくりファンド

- 1992年にトラまちの前身の財団と関係者で設立
- 住民グループが企画申請したまちづくり活動 = 「身近な環境をよくする活動」を審査し、採択されたグループが助成金を与えられ活動を実施する仕組み
- 世田谷で最初の市民活動助成のしくみ



ファンド助成事業 25年間の実績

項目	実績値
応募件数	852件
助成件数	714件
応募グループ数	522グループ
助成グループ数	371グループ
助成総額	2億94万円
助成グループメンバー数(推計)	のべ 約8,300人

※20周年時1グループあたりメンバー数平均12名より試算

まちづくりファンド 助成事業の公開審査会・活動発表会 +初めまして交流会

- 第一義的には「審査」や「報告」の場だが、参加している活動グループや、他の参加者（運営委員 = まちづくりの専門家 等）の相互間の「学びと交流」を重視
- 助成団体は年間3、4回のイベントに参加が必要
- ①プレゼンを相互に聞きあう、②ポスターセッションの時間を設ける、③互い（の活動）の繋がりを意識してもらうプログラム
- これまでに多くの連携・協働が生まれている

公開審査会

審査と
ポスターセッション







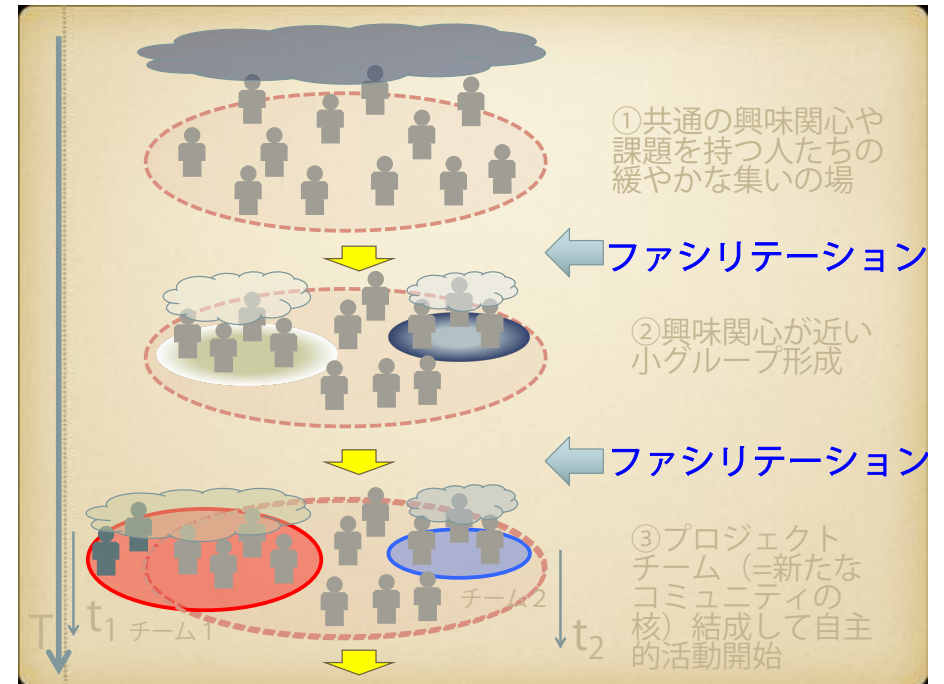
以前は「中間活動発表会」なるものも
(トラまちの「まちづくり交流会」に引き継ぎ)



「協働」を作り出す

緩やかな交流の場からの コミュニティ+アクションづくり

- まずは共通の課題や興味関心をテーマとする、集いの場・交わる場（楽しい、行きたい場）を作ること
- 一度の集まりで終わるのではない、アクションが起こる（+コミュニティが生まれる）ことをゴールとする継続的な場を運営すること
- 地域の課題や資源を理解し、共有しながら、課題解決を見据えつつ、集まったメンバーが「やりたいこと」や「得意なこと」に取り組んでゆくように導くこと（ファシリテーション）



事例⑤：黒石の未来づくり ワークショップ （先ほどのNPO法人でやったもの）

- 設立以来、沢山の実績を重ね、松の湯交流館の指定管理者になって1年が過ぎて、運営も目途がついた！
- しかし、その結果「やるべきこと」が活動の中心になってきてはいないか？
- 最近、新会員が加わったし、改めて、松の湯で、黒石のまち中で、そだて会のメンバーみんなで、「やりたいこと」を考えてみるのがいいのでは？
- 松の湯を「自分たちの城」に！定例会も面白くなればいい！

ワークショップのテーマ

これからの黒石の
まちなかでやった
らオモシロいこと
は何でしょう？

ワークショップの プログラム (120分)

1. はじめに (15分)
2. やりたいことを元に“チーム”をつくってみよう (20分程度)
3. チーム毎に今後やってみたいことをじっくり考えてみよう (60分程度)
4. チーム毎の発表会 (20分)
5. おわりに (5分)

以下を色紙に書いて
互いに見せ合い、チームを編成
(「マグネットテーブル」という手法)

- **自分の黒石の未来への想い**
 - 「こんな黒石の未来を目指したい！」
 - **黒石のまち中や松の湯で“やりたいこと”**
 - 「こんなことやってみたい！」
 - 「こんなコトをやったら楽しい！」
 - 「こんなコトをやっていたら通いたい！」
- ◇ タイトル + 具体的イメージ・内容
 - ◇ 色紙と太いマーカーを使って記入



「今後やりたいことをじっくり考える」 話し合う内容

- ① このチームのテーマは？
- ② こんなことをやってみたい～改めて活動アイデア出し～
- ③ このプロジェクトにあつたらいいもの・たりないもの
- ④ その活動を通じた黒石の未来の姿は (プロトタイピング)



小括

- 参加も、交流も、協働も「狙って」（意図的に）おこなうものである
- つまり、市民が主体的に動けるように、あるいは自分たち以外の人々との協力関係を築けるようにするために、周到なプログラムを準備しておこなうものである（何となく、できるものではない）
- 参加も、交流も、協働も全て、その延長上にあるゴールは、地域課題の解決、地域活性化やより良い地域社会の構築である

3. 地域課題解決プラットフォームを機能しやすくする 場所づくりのためのヒント

「地域課題解決プラットフォーム」 とは？①

- 「地域の課題解決のために、関係者が集まり、水
平な立場で対話と協議をする場」をいう（常設の
場所は必須ではなく、イベント的開催でもOK）
- 地域課題を解決する仕組みやそれを動かしやすく
するための運営者の在り方、場所の作り方などに
ついて、仲間とともに研究中（卯月先生が座長）
- 参加・交流・協働のためのスペースを考える上で
重なる部分も多いためご紹介

「地域課題解決プラットフォーム」 とは？②

- 4つのステップから構成される
【情報共有のプラットフォーム】
①課題の把握・共有
⇒多くの人々との関わりの中で行われる
- 【課題解決のプラットフォーム】
②課題に対する理解を深めて解決策を協議
③解決策実現のために具体的協議
④解決策の実施・検証
⇒実際に課題解決に携わるメンバーで設定

(1) アクセシビリティ を高めること

- 外からの見え方、入り口部分の“しつらえ”はとて
も重要
- そこに「行ってみたい」という仕掛け、物理的な
入りやすさ、滞留しやすい雰囲気
- その場所に入出入りすることにより、地域の様々な
情報が運び込まれ、滞留すれば対話が生まれ、情
報が広く共有される可能性が向上

①外から「見える」こと

- 建物外部を行き交う人々が中で何をやっているか
「見える」ようにする
- 「掲示板を」設置したり、「サイン」計画に気を
配ったりすることも大切
- 建物の内部空間にスムーズに人を誘導できるよう
にする



活動を伝える掲示板（岡さんのいえTOMO）

②いつでも誰でも利用できる フリースペース

- ちょっとした「おしゃべり」や「打ち合わせ」が自由にできる机や椅子を配置する
- 利用者がひと息つけるように、飲料の自販機などを設置するのもよい
- 行政や市民活動団体の出版物や関連図書、資料などを閲覧できるようにもしたり



フリースペース（「東京市民活動ボランティアセンター」）市川徹氏撮影

③バリアフリー & ユニバーサルデザイン

- 多様な人々の対話の場にするにはバリアフリー、ユニバーサルデザインの配慮が必要
- 社会的弱者がアクセスできる場所は、誰にとってもアクセスしやすい
- お年寄りや障がい者はもちろん、子育て中の親が安心して、子どもを連れて訪問できるように、おもちゃ・絵本の用意、オムツ換えや授乳のためのスペースを設置するなどの工夫も



子どもが楽しい時間を過ごすための仕掛け（コミュニティカフェ「こまちカフェ」、横浜市）

④常時アクセスできる窓口

- 市民活動支援を目的としている「拠点型中間支援組織※」には、事業所の入口付近に「窓口」がある
※まちづくりセンター、市民活動支援センター、ボランティアセンターなど
- 形態は様々だが、スタッフが市民の相談に乗る対面式カウンターが設置されていることが多い
- ここで行われる相談を通じて、地域課題が発掘され、顕在化することも
- Webでは得られない情報を得たり、直接的対話だからその即興性や創発性がある



窓口・カウンター（『生活工房 市民活動支援コーナー』）市川徹氏撮影

⑤情報展示コーナー、 チラシ（フライヤー）ラック

- 組織の取り組みを市民に知らせるためのポスターの掲示
- 組織や市民活動団体のイベントなどのチラシ（フライヤー）のラックの設置
- 利用者は特に相談することがなくても、気軽に事務所を訪れ、必要な情報を入手可能



情報展示コーナーとチラシラック(「東京市民活動ボランティアセンター」)

(2) 多目的に対応したスペースや設備

①プログラムに応じて 使い分けできること

- 打ち合わせや会議の規模に応じて使い分けできる
大小会議室、または可動式のパーティションのある
大きな部屋は土台となる空間
- 可動・折り畳み式の机や椅子、模造紙などを張れる
壁やホワイトボード、収納スペースや物品置き
場なども基本的な設備

②活動・作業を さらに発展させる設備

- 市民活動支援拠点には、印刷機や紙折り機などの
設備が設置されていることが多い
- チラシ (フライヤー) やパンフレットだけでなく、
ポスター作成用に大判印刷が可能なプロ
ッターを設置しているところも
- 「コ・ワーキングスペース」をはじめとする民間
の拠点には、Free Wi-Fi、音響設備、プロジェク
タ、スクリーンなど常備
- キッチンがあれば「食」をテーマとした活動が可
能となり、大きく幅が広がる



多目的な利用を支える設備 (コ・ワーキングスペース「シェア奥沢」)

③利用者が多様な 関わり方ができること (様々な目的での利用が可能であること)

- コミュニティカフェが好例
- 「食」「地域交流」「子育て」などの特定テーマを持つものが多く、テーマ関連イベントが開催され関心のある人々が集い、対話が促され、課題が共有され、具体的な動きが起こる…
- カフェだけの利用も可能
- 「小箱ショップ」で自己実現や収入を得る
- 絵画や写真などのギャラリーがある
- 行政のランチ的機能（チラシやファイル）をもつ



子育て中の母親の作品が並ぶ小箱ショップ（コミュニティカフェ「こまちカフェ」、横浜市）

(3) 対話・協議が弾む雰囲気演出

- ①アットホームな雰囲気づくり
- ②素材やディテールへのこだわり

- どこにでもある「打ち合わせスペース」は市販の無機質な事務机やパイプ椅子を用いるが、あえて畳敷きのスペースを整備したり、座り心地のいいソファを用意したりする
- 素材に木を使って、手作り感にあふれた、明るい雰囲気にしたりする
- ちょっとしたスペースに小物を置いたり、飾り付けしたりする



畳敷きのミーティングスペース（「東京市民活動ボランティアセンター」）



店内を彩る数々の小物や装飾（コミュニティカフェ「こまちカフェ」、横浜市）

③フューチャーセンター という専用空間

- ・特定のテーマに対して、立場の違いを超えた対話を促し、アイデアを出し合ったり議論したり、協調アクションを生み出したりするのに適した雰囲気づくりを徹底して設計された施設
- ・例えば以下のようなスペース・設備で構成される
 - ・利用者の交流やアイデア共有のためのスペース
 - ・会場の雰囲気を自在に変化させる照明、プロジェクタとスクリーン、音響設備
 - ・クローズな会議のためのミーティングルーム
 - ・リラックスできるソファや植栽 など



「カタリストBA」の鳥瞰図



多目的な用途に利用できる空間（フューチャーセンター「カタリストBA」）

(4) 利用者のコミュニケーションを意識したレイアウト

①対話を生み出す動線づくり



通路と会議スペースの仕切高の抑制によって対話を演出（「こまちカフェ」）

②プログラムに即した会場のルームアレンジ

- ・対話・協議を構成する会議やイベントでは、設備の配置に十分気を配る必要
- ・スペース内での机や椅子の配置方法で人の振る舞いは大きく変化し、対話や協議の質に影響が及ぶ



出典：世田谷トラストまちづくり「参加のデザイン道具箱 Part2」（以降も同じ）



ステークホルダーを集めた円卓会議（「みらいファンドおきなわ」）

③ちょっと立ち話のできる空間

- ・イベント終了後に立ち話のできる空間を設けるなど、利用者が立ち止まり滞留したくなるようなスペースがあるといい
- ・会場を出た先にもそのような空間があると、名刺交換をしたり、会議内容を振り返ったり、終了後の余韻に浸ったりするなど、さらなるコミュニケーションを生む
- ・シンボルツリーやお手製のベンチがあるとよい



小括

- この他にも場所づくりの工夫は数多くある
- 公共空間、民間のスペースを問わず、実際に現場に行って立地から、椅子機の配置や小物・道具といったディテールまで観察すべき
- 季節毎にレイアウトを変えたり、明るい雰囲気作りを常に心がけたり、参加者属性に併せてしつらえをアレンジするなどの柔軟性もあっていい

4. おわりに

お話の結びに

- 単に「スペース・設備（ハード）」があるだけでは参加・交流・協働が生まれることを期待できない
- 積極的に参加・交流・協働を生み出したいのなら、この空間で達成したいことの「ビジョン」を描き、そのための「プログラム（ソフト）」を考えることが本質であり、その次に「それを可能にするハードは何か？」を考える流れになるはず
- 同時に「ソフト」の運営者についても考える必要があるが、今回のスペースづくりのプロセスを通じて、運営組織を創出してゆくのが理想（これぞまさに世田谷方式！）

おまけと 提案

- 運営されるプログラム（プロジェクト）にはレベルがありそう
- 日常的なもの／定期的なもの（ひと月に一回（例土日）、季節毎に一回、半年に一回、季節毎に一回とか）
- 旧来の市民活動の普及・支援に関わるモノ／戦略的に新しい活動・事業やその主体などを生み出すためのモノ
- これらを体系的に組み立てた上で空間を構想するのがよいのでは？